



**Data**

監督・脚本：木村大作  
原作：笹本稜平『春を背負って』（文藝春秋刊）  
出演：松山ケンイチ／蒼井優／豊川悦司／壇ふみ／小林薫／新井浩文／吉田栄作／安藤サクラ／池松壮亮／仲村トオル／市毛良枝／井川比佐志／石橋蓮司

## 👁️👁️ みどころ

舞台を劔岳から立山連峰の大汝山に移しても、長くカメラマンとしての人生を歩んできた木村大作監督の目は厳しい。背中にあんなに大量の荷物を背負って歩かなければならないのなら、山小屋の経営なんてとてとても。投資銀行のトレーダーの方がきっと楽なはず・・・？

父を失っても、良き先輩、良きスタッフさえいれば、山小屋の経営は大丈夫。本作に見るそんなストーリーはある意味理想的（安易？）だが、あの厳しい大自然の中では、そんな組み合わせもありかな、と思わせてくれるところがミソ。

あまり難しいことは考えず、ただ自然の良さと人間の良さを本作でタップリと！



### ■□「二匹目のドジョウ」は、人間ドラマに重点を！■□

カメラマンとして数多くの名作・話題作の撮影を続けた木村大作が、はじめて監督に挑戦したのが『劔岳（つるぎだけ） 点の記』（08年）（『シネマルーム22』250頁参照）。「CGなし！へりなし！俳優もスタッフも荷物を担いで山登り。『これは撮影ではなく行（ぎょう）だ』と宣言して完成させた同作は、壮大な自然とそれに挑むちっぽけな人間たちの壮絶なドラマをタップリ味わうことができたが、主役はあくまで「測量」の対象となった劔岳の大自然だった。監督作品はこれ一本だけ。それが彼の「公約」だったが、それを翻意して挑んだ2作目は、笹本稜平原作の『春を背負って』の映画化。舞台を劔岳から富山県・立山連峰の大汝山（3015メートル）に移した本作でも、長嶺勇夫（小林薫）が山頂に作った、「葎（すみれ）小屋」と名付けられた山小屋の維持・運営は大変な仕事だ。

勇夫がそれに黙々と励む姿を見ていた一人息子の亨（松山ケンイチ）は、父親に対する多少の反発もあって、今は東京の外資系投資銀行グローバル・アセット・キャピタルのトレーダーとして働いていたが、ある日突然、父死亡の知らせを聞くと・・・。

デビュー作で日本アカデミー賞最優秀監督賞、キネマ旬報ベスト・テン日本映画監督賞等を受賞した木村監督は、同じ「山岳モノ」で二匹目のドジョウを狙ったが、ここでは山や自然の厳しさより、人間ドラマに重点を。

## ■背負うものを、ゼニから荷物に■

本作冒頭、朝倉隆史部長（仲村トオル）の下で将来の幹部候補生と期待されながらも、何億円、何十億円もの資金を運用するトレーダーとしてのプレッシャーに苦しむ亨の姿が映し出される。そんな亨は父親の死亡によって故郷へ帰ったことによって、父親の董小屋を継ぐ決心を。夫の死亡によって、山小屋と民宿両方の経営はムリと判断し、既に山小屋は知り合いに譲る決意を固めていた母親の董（壇ふみ）は、亨には山小屋の仕事を継ぐのは到底ムリだと反対したが、さて亨の決意は？

そこに1年前から董小屋を手伝い、美味しい料理を出していた高澤愛（蒼井優）の存在があったのかどうかは不明だが、この決心によって亨は背負う荷物をゼニから荷物に変えたわけだ。山小屋の経営のしんどさは、山の下から背中に担いで運んでいかねければならない荷物の量だということが、本作を観ているとよくわかる。もちろん、ヘリコプターを使えば簡単だが、それではあまりに経費がかさむらしい。山の上では水やビール等の料金が非常に高いが、それは原価にこの運び賃が加算されるため。東京の高層ビルのクーラーの効いた部屋で高級スーツを着てパソコンとにらめっこしていた亨には、いくら若い時の経験があっても、そんな仕事は到底ムリ。「俺が親父のあとを継ぐんだ」という決意だけで、そんな重い荷物をホントに背負うことができるの？

## ■全編通してのキーマンは、風来坊のゴロさん！■

昔流行った歌に、『山男の歌』というのがあった。その歌詞は「娘さんよく聞けよ 山男にや惚れるなよ 山で吹かれりやよ 若後家さんだよ 山で吹かれりやよ 若後家さんだよ」というものだ。山小屋を継ぐ決心をして、1人荷物を背負い歩き始めた亨の側にいつしか寄り添って来たベテラン山男が、通称ゴロさんこと多田悟郎（豊川悦司）。悟郎の言うところによると、夢枕に勇夫が立ち、「息子のことをよろしく頼む」と言っていたそうだが、さてその真偽の程は？

豊川悦司は大阪府生まれだから関西弁は得意なはずだが、本作に聞く悟郎の言葉は関西弁と東京弁（？）が入り交じっている。彼はバブルの頃は建設会社の経営で大儲けしたのにあえなくそれを潰してしまったという「武勇伝」をもつ、根っからの自由人だが、時々亨に対してホントの息子のように語りかける言葉には含蓄がある。「カネのことは心配しな

くていい。時々小遣いでも貰えばいいから」という条件での亭との「雇用契約」は、今ドキのコンプライアンス遵守の風潮や、「労働基準法を守れ！」の声の高まりの中ではありえないもの。さらに、そもそも悟郎のようなキャラの男は、今ドキ絶滅品種だろう。

しかし、映画ならそんなキャラの人物を映画の主役の一員に起用するのも自由。本作前半では亭のリード役（後見役）として、そして後半では亭のお荷物役（？）としてキーマンとなる、そんな悟郎の人間性を本作でしっかり確認したい。

## ■□■こんな有能なスタッフが身近にいれば・・・■□■

「異次元の金融緩和」政策を断行した日銀の黒田東彦総裁とコンビを組んでの安倍晋三総理による「アベノミクス」は、目下のところ順調。心配された消費増税による景気の落ち込みも何とかクリアし、「デフレ脱却」という大目標は成功しつつある。その反面、現在浮上している問題が、人件費の上昇、とりわけ非正規社員の時給（バイト代）の上昇だ。そのため、これまで低賃金のバイトを大量に雇い、大量の安い商品を出すことによって利益を上げてきた、牛井の「すき家」や居酒屋の「和民」等は、現在人件費の上昇に苦勞し、すき家では数十店が店じまいを余儀なくされている。

そんな時代状況下、董小屋には明るくよく働き、しかも料理のうまい愛のような「従業員」がいたから、亭は大助かり。愛は大汝山への登山で足をくじき、倒れ込んでいるところを勇夫に助けてもらい、以降、勇夫を手伝って董小



発売元：フジテレビジョン 販売元：東宝  
© 2014「春を背負って」製作委員会

屋で働いていたそうだ。しかし、弁護士目で見れば、亨が董小屋を引き継ぐにあたっては、彼女の履歴の確認はもちろん、労働条件の細部にわたるツメが必要なはずだ。ところが、本作ではそんなシーンは全くなく、「よろしくお願いします」だけ。弁護士事務所の経営のため、優秀な事務員探しに40年間ずっと苦勞している私から見れば、愛のような人材がいれば鬼に金棒だが、ハッキリ言って今ドキ愛のような優秀な人材がいるはずはない。愛の「身の上話」は本作中盤で、亨とゴロさんに対してしっかりされるので、それに注目したいが、こんな有能なスタッフが身近にいれば、亨はまさに鬼に金棒。そんな2人が助け合って董小屋を経営している姿を見ていけば、人生経験豊かな董もゴロさんも、この2人の行く末がどうなるのかの予測は当然つくはずだ。

## ■□■ミエミエのストーリーの積み重ねだが、それでも・・・■□■

『劔岳 点の記』はストーリー展開の意外さも見られたが、木村監督も脚本を書いた本作のストーリーは、ミエミエのものばかり。まず本作の基本軸が①山小屋のオーナーとしてはまだ半人前の亨を後見役の悟郎がいかにか一人前に育てていくか、②亨と愛の結婚はいつどんな形で実現するか、の2点であることは映画が始まれば、すぐにわかる。故郷に根を下ろし、妻・ユリ（安藤サクラ）と一人息子と共に家具職人として頑張っている、亨の幼馴染・中川聡史（新井浩文）は、あくまでサブ役で亨を支える役割だ。そんな聡史が董小屋に勇夫から依頼されていたイスをやっと完成させて運び込んできたところから、「異変」が発生し、ラストに向けた少しばかり波乱のストーリーが展開していくことになる。つまり、亨の後見人役として董小屋でパーフェクトな役割を果たしていた悟郎がここで突如倒れ込むというハプニングが発生するわけだが、さてそれに対する亨の対応は？ 2012年のNHK大河ドラマ『平清盛』での清盛役は少し荷が重い感じだった松山ケンイチが、本作では年相応かつ等身大の若者の生きざまをみずみずしく演じている。

脳梗塞で倒れた男を雪の中で背負って歩くことの医学上の是非はよくわからないし、人間を寝かせて雪の上を滑らせるそりのようなものが山小屋に備え付けられていないのがちょっと不思議だが、そういうことを無視すれば、このシークエンスは亨の董小屋の責任者としての「根性」を見せつけるに十分だ。ここが本作最大のハイライトであり、これを持ち越えれば、悟郎の生還と亨の一回り大きく成長した姿が見られること確実だ。他方、誰が見てもこの2人は夫婦になるのが当たり前と思われる、亨と愛の結婚もミエミエだが、さてその時期とプロポーズの舞台は？

そんなミエミエのストーリーながら、大自然の中で自然なセリフが展開されると、つい涙ぐんでしまうことも……。また、ミーちゃんハーちゃんではないから、プロポーズの舞台や結婚式場等はどこでも同じと思ってる私ですら、勇夫が秘かに発見し、悟郎だけに教えていたという絶景の舞台でのプロポーズのシーンを観ると……。そんなこんなも考えると、木村大作監督が狙った、二匹目のドジョウも大成功……。

2014（平成26）年6月10日記